

表4-10-3 問題行動に対する姿勢と自己存在感のなさ

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
自転車盗	2.56(0.90)	2.52(0.73)	2.23(0.87)	2.39(0.86)	2.88(1.02)	2.26(0.86)	F(2,575)=8.51**(とめるか)
盗み	2.63(0.88)	2.46(0.76)	2.28(0.87)	2.79(1.09)	2.80(0.89)	2.27(0.87)	F(2,574)=6.36**(とめるか)
恐喝	2.55(0.81)	2.65(0.71)	2.27(0.89)	2.64(1.21)	2.59(0.98)	2.29(0.87)	F(2,574)=4.01*(とめるか)
暴行	2.67(0.77)	2.56(0.92)	2.23(0.85)	2.93(0.89)	2.69(0.97)	2.26(0.87)	F(2,570)=8.68**(とめるか)
薬物	2.78(0.86)	2.83(0.69)	2.26(0.86)	2.88(1.18)	2.63(0.88)	2.28(0.87)	F(2,574)=9.06**(とめるか)
軽援交	2.53(0.92)	2.42(0.70)	2.21(0.88)	2.53(0.93)	2.38(0.95)	2.26(0.86)	F(2,569)=5.26**(とめるか)
重援交	2.49(0.94)	2.45(0.70)	2.28(0.88)	2.56(1.13)	2.67(0.95)	2.26(0.86)	F(2,568)=4.81**(とめるか)
性強要	2.71(0.83)	2.51(0.76)	2.26(0.88)	3.02(0.90)	2.56(0.83)	2.24(0.88)	F(2,567)=11.68**(とめるか)

第11項 問題行動と自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』との関連

①問題行動の実体験の有無と自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』

高校生の自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-11-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、自転車窃盗および盗みであった。自転車窃盗や盗みの経験がある者の方が、ない者よりも自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点が低かった。従って、自転車窃盗や盗みの経験がある者の方が、ない者よりも、日常生活において自分自身の欲求と現実環境とのかねあいをしながら、自身の能力に応じて活動することができる自我機能が未熟であることが示された。

表4-11-1 問題行動の実体験の有無と『総合・統合機能-支配・有能性』

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
自転車盗	3.19(0.68)	2.92(0.67)	3.23(0.64)	3.07(0.48)	F(1,587)=4.82*(体験)
盗み	3.18(0.70)	3.02(0.60)	3.25(0.64)	3.01(0.47)	F(1,586)=6.90**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』

高校生の自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『総合・統合機能-支配・有能性尺度』得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-11-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、自転車窃盗、盗み、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際の4種類の問題行動であった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が「いけない」と思っている者よりも自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点が低かった。

従って、自転車窃盗、盗み、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際を「いけない」と思う者よりも、「いい」と思っている者の方が、日常生活において自分自身の欲求と現実環境とのかねあいをしながら、自身の能力に応じて活動することができる自我機能が未熟であることが示された。

なお、飲酒については交互作用がみられた。

表4-11-2 問題行動に対する意識と『総合・統合機能-支配・有能性』

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでも	いけない	いい	どちらでも	いけない	
飲酒	3.07(0.69)	3.33(0.58)	3.26(0.68)	3.23(0.61)	3.07(0.63)	3.34(0.66)	F(2, 585) = 3.39*(交互作用)
自転車盗	2.83(0.64)	2.86(0.78)	3.19(0.67)	3.24(0.60)	2.71(0.55)	3.38(0.63)	F(2, 584) = 5.60**(いけなさ)
盗み	3.16(0.65)	2.74(0.74)	3.26(0.68)	2.88(0.45)	2.80(0.64)	3.24(0.63)	F(2, 585) = 4.98**(いけなさ)
薬物	2.99(0.71)	2.67(0.61)	3.20(0.67)	3.23(0.68)	2.93(0.50)	3.44(0.63)	F(2, 585) = 4.28*(いけなさ)
軽援交	3.02(0.71)	3.11(0.62)	3.24(0.68)	3.05(0.64)	3.15(0.59)	3.30(0.63)	F(2, 582) = 6.92**(いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』

高校生の自我機能・『総合・統合機能-支配・有能性』と性別(「男子」「女子」の2水準)、問題行動を「とめるか」「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準)との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-11-3に示す。

問題行動を「とめるか」の主効果による有意差があったのは、飲酒、無免許、自転車窃盗、盗み、恐喝、軽度の援助交際の6種類の問題行動であった。これらの問題行動を「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも自我機能『総合・統合機能-支配・有能性』尺度得点が低かった。従って、友達が飲酒、無免許、自転車窃盗、盗み、恐喝、軽度の援助交際をしているのを見た時に「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも、日常生活において自分自身の欲求と現実環境とのかねあいをしながら、自身の能力に応じて活動することができる自我機能が未熟であることが示された。

表4-11-3 問題行動に対する姿勢と『総合・統合機能-支配・有能性』

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
飲酒	3.10(0.70)	3.18(0.43)	3.45(0.58)	3.21(0.61)	3.23(0.74)	3.27(0.64)	F(2,585)=3.20*(とめるか)
無免許	3.00(0.67)	3.03(0.58)	3.27(0.69)	3.16(0.68)	3.08(0.55)	3.26(0.63)	F(2,585)=5.44**(とめるか)
自転車盗	2.93(0.74)	3.21(0.57)	3.22(0.66)	2.98(0.46)	2.97(0.59)	3.27(0.64)	F(2,585)=6.63**(とめるか)
盗み	2.92(0.82)	3.07(0.66)	3.21(0.64)	3.05(0.73)	3.05(0.54)	3.24(0.63)	F(2,584)=3.22*(とめるか)
恐喝	2.90(0.85)	3.01(0.67)	3.21(0.63)	2.86(0.78)	3.15(0.58)	3.24(0.63)	F(2,584)=4.12*(とめるか)
軽援交	2.94(0.66)	3.10(0.65)	3.30(0.67)	3.15(0.58)	3.12(0.65)	3.27(0.63)	F(2,579)=7.07**(とめるか)

*p<0.05, **p<0.01

第12項 問題行動と自我機能『現実感覚』との関連

①問題行動の実体験の有無と自我機能『現実感覚』

高校生の自我機能『現実感覚』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『現実感覚』尺度得点を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-12-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、盗み、恐喝、暴行および薬物・ドラッグであった。盗みや恐喝、暴行、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも自我機能『現実感覚』尺度得点が高かった。従って、盗みや恐喝、暴行、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも、自分と他人はそれぞれ独立した存在であるという意識や、また自らの個性や独自性、安定した身体イメージ、自尊感情などにおける発達が未熟であることが示された。

表4-12-1 問題行動の実体験の有無と『現実感覚』

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
盗み	2.16(0.86)	2.42(0.79)	2.35(0.84)	2.60(0.84)	F(1,586)=6.61*(体験)
恐喝	2.14(0.80)	3.25(0.93)	2.37(0.84)	3.06(0.1.33)	F(1,587)=8.27**(体験)
暴行	2.07(0.80)	2.43(0.88)	2.35(0.83)	2.63(0.89)	F(1,584)=11.70**(体験)
薬物	2.18(0.84)	2.98(0.88)	2.36(0.83)	3.67(1.41)	F(1,587)=14.64**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自我機能『現実感覚』

高校生の自我機能『現実感覚』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『現実感覚』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。

その中で有意な結果のあらわれたものを表4-12-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、盗み、恐喝、軽度の援助交際、重度の援助交際、性行為の強要の6種類の問題行動であった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が、「いけない」と思っている者よりも自我機能『現実感覚』尺度得点が高かった。従って、これらの問題行動をいいと思っている者の方が、いけないことと思っている者よりも、自分と他人はそれぞれ独立した存在であるという意識や、また自らの個性や独自性、安定した身体イメージ、自尊感情などにおける発達が未熟であることが示された。

なお、暴行については交互作用がみられた。

表4-12-2 問題行動に対する意識と自我機能『現実感覚』

	男子			女子			主効果・交互作用
	いい	どちらでも	いけない	いい	どちらでも	いけない	
盗み	2.42(1.17)	2.69(1.00)	2.17(0.81)	2.46(0.26)	3.36(1.06)	2.34(0.82)	F(2, 585) = 9.45** (いけなさ)
恐喝	2.33(1.20)	2.70(0.99)	2.17(0.81)	2.56(0.97)	3.81(1.30)	2.36(0.82)	F(2, 584) = 8.63** (いけなさ)
暴行	2.56(0.97)	2.16(0.94)	2.17(0.81)	3.19(1.27)	2.95(0.86)	2.32(0.81)	F(2, 582) = 4.20* (交互作用)
薬物	2.50(1.08)	2.87(0.92)	2.13(0.79)	3.20(1.18)	2.82(0.85)	2.34(0.82)	F(2, 585) = 11.45** (いけなさ)
軽援交	2.41(1.00)	2.18(0.74)	2.10(0.77)	2.47(0.86)	2.49(0.87)	2.32(0.83)	F(2, 582) = 3.79* (いけなさ)
重援交	2.48(1.00)	2.22(0.81)	2.12(0.80)	2.60(1.03)	2.46(0.89)	2.35(0.83)	F(2, 580) = 3.24* (いけなさ)
性強要	2.99(1.15)	2.39(0.71)	2.12(0.79)	2.79(1.42)	2.62(0.88)	2.35(0.82)	F(2, 580) = 7.55** (いけなさ)

*p<0.05, **p<0.01

③問題行動に対する姿勢と自我機能『現実感覚』

高校生の自我機能『現実感覚』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動を「とめるか」（「とめない」「どちらでもない」「とめる」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『現実感覚』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-12-3に示す。

問題行動を「とめるか」の主効果による有意差があったのは、盗み、恐喝、暴行、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、性行為の強要の6種類の問題行動であった。これらの問題行動を「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも自我機能『現実感覚』尺度得点が高かった。従って、友だちが、盗み、薬物・ドラッグ、軽度の援助交際、性行為の強要をしているのを見た時に「とめない」と思っている者の方が、「とめる」と思っている者よりも、自分と他人はそれぞれ独立した存在であるという意識や、また自らの個性や独自性、安定した身体イメージ、自尊感情などにおける発達が未熟であることが示された。

なお、暴行については交互作用がみられた。

表4-12-3 問題行動に対する姿勢と自我機能『現実感覚』

	男子			女子			主効果・交互作用
	とめない	どちらでも	とめる	とめない	どちらでも	とめる	
盗み	2.53(1.09)	2.16(0.77)	2.15(0.79)	3.03(0.77)	2.71(1.08)	2.33(0.82)	F(2,584)=7.87**(とめるか)
恐喝	2.27(0.94)	2.56(0.90)	2.15(0.82)	2.59(1.11)	2.63(1.17)	2.35(0.82)	F(2,584)=3.57*(とめるか)
暴行	2.39(0.99)	2.28(0.86)	2.16(0.82)	3.52(1.15)	2.67(0.88)	2.32(0.82)	F(2,580)=3.68*(交互作用)
薬物	2.40(1.01)	2.75(0.91)	2.15(0.81)	3.05(1.17)	2.40(1.04)	2.35(0.82)	F(2,584)=6.25**(とめるか)
軽援交	2.43(0.92)	2.22(0.75)	2.05(0.81)	2.54(0.96)	2.25(0.78)	2.27(0.83)	F(2,579)=4.69*(とめるか)
性強要	2.61(1.06)	2.38(0.69)	2.09(0.79)	2.57(1.00)	2.53(0.89)	2.35(0.83)	F(2,577)=5.70**(とめるか)

*p<0.05, **p<0.01

第13項 問題行動と自我機能『衝動統制』との関連

①問題行動の実体験の有無と自我機能『衝動統制』

高校生の自我機能『衝動統制』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の実体験（「ある」「ない」の2水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『衝動統制』尺度得点を従属変数とした2×2の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-13-1に示す。

問題行動の実体験の有無についての主効果による有意差のあった問題行動は、盗みおよび暴行であった。盗みや暴行の経験がある者の方が、ない者よりも自我機能『衝動統制』尺度得点が高かった。従って、盗みや恐喝、暴行、薬物・ドラッグの経験がある者の方が、ない者よりも、自分の感情や欲求、衝動を、その時々状況を省みることなしにそのまま表現しやすいことが示された。

表4-13-1 問題行動の実体験の有無と自我機能『衝動統制』

	男子		女子		主効果・交互作用
	ない	ある	ない	ある	
盗み	2.97(0.85)	3.23(0.67)	3.03(0.78)	3.29(0.87)	F(1,586)=8.01**(体験)
暴行	2.92(0.80)	3.17(0.85)	3.04(0.80)	3.27(0.72)	F(1,584)=7.15**(体験)

*p<0.05, **p<0.01

②問題行動に対する意識と自我機能『衝動統制』

高校生の自我機能『衝動統制』と性別（「男子」「女子」の2水準）、問題行動の「いけなさ」（「いい」「どちらでもない」「いけない」の3水準）との関連を検討するため、自我機能調査票のうち『衝動統制』尺度得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。その中で有意な結果のあらわれたものを表4-13-2に示す。

問題行動の「いけなさ」の主効果による有意差があったのは、薬物・ドラッグであった。これらの問題行動を「いい」と思っている者の方が、「いけない」と思っている者よりも